

繊細な痕跡の群れ

アグネス吉井 (KEKE・白井愛咲) 『みうしない』

奥田浩貴

手旗信号の様な舞いをする他方を、一方が抱えながら舞台対角線を共に前方へ、あるいは一方が他方の背を押してあげることで舞台対角線を前方へ進む。信号はどこへ向けて送っているのだろうか。全体の構成は男女二人の「呼吸」の合った `syn_chronize` したダンスが基調となっている。連結した小さな汽車の様に、同じ振盪で前後を入れ替わりつつ、足元に繊細な幾何学模様の軌跡を残しながら舞う。

会場へと続く扉は開け放たれており、日中の光が差し込んでいる。操作しきれない不確定要素=ノイズも公演という一つの束に同_期されているのである。本作は、一連の可能な読みの潜在的に無限な系列へと開かれており、その読みのそれぞれは、ある展望、ある趣味、ある個人的演奏=上演に応じて作品を蘇らせることになる。テニスボールがリズムを伴ってラケットに接触する音、靴底が砂利の粒を踏みしめる音、エレベーターが奏でるチャイム。会場の外から聴こえて来るそれらの音は人間の営み、あるいは自然が意図せず残した痕跡となり、演者・観客は、意味とは逸脱するような体温を持った身体 (物質性) を遠くの場所を感じ取ることであろう。更に、それらの意識化された「ありふれた日常の基調音」が誘い水ともなり、ノスタルジーを伴って無意志的記憶をも想起させ、各観客が本作の各々の「見えない背景 (遠景)」を構成するのである。

同_期された微細な日常の音の群は、本作の基調音を構成しながら、スナップ写真群の換喩とも言い得るダンスを具体化する。日常の音の群に相俟って、家の中、散歩道、公園など、日々の営みを抽象化した特定されない場が、シーン=「見えない背景 (近景)」として想起される。それらの「写真群」の主題は男女2人が上演する『みうしない』である。常に「呼吸」の合った `syn_chronize` した構成にはなっていない。舞台中央で横わった白井氏に対して、KEKE氏が僅かな足音を刻みつつ、その周囲を回る。そこに距離はありながらも、視線は白井氏に注がれている。そして対称的に、横たわった KEKE氏に対して、白井氏が舞台対角の離れた位置から観守る場面へと展開する。声を発する代わりに爪先と地面が奏でる音によって、`communi_cation` を図っているかの様である。これらの場面では外部からやって来た音は意識の中で遠のき、横たわってしまった相手に対する微音=繊細にステップを踏む音が前景に痕跡を残す。日常の中で当然の様に「同_期」されている状態は、間のずれによって不協和音に変化してしまう。他者の経験を再構成する間主観性にも限界があり、他者は了解仕切れないということ「再_現」しているのである。その上で、他者の現れでもあり固定されないイメージである「顔」を汲み取ろうと観つめる。そして上記の不協和音を乗り越え、再び「呼吸」を合わせた舞いでエンディングを迎えるのである。

本作には、個々人の無意志的記憶を呼び起こす記号が随所に散りばめられており、保温をも用途とし、個人の皮膚の拡張とも喩えられる衣服や家がキーワードとして浮かび上がってくる。「みうしない」の舞い、それに伴う足音、外部の音等、即物的な要素群に対して、先行するテキストが流れ込み、解体・再構築され再編されることできめ細やかな織物が生まれることであらう。

(1323 字)